様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２４９６

研究課題名（和文）19世紀英米作家のホームの感覚と太平洋表象についての研究

研究課題名（英文）A Study on Sense of Home in the 19-centuryBritish and American Authors and Their Pacific Representations

研究代表者
山本　卓（Yamamoto, Taku）

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：１０２９３３２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は文学作品における太平洋表象と、作家や語り手の帰属意識（ホームの感覚）との影響関係を探った。対象とした作品は19世紀から20世紀初頭に至る英語圏小説で、作家の現地での見聞を反映した作品は、探検記や旅行記に依拠した物語よりもリアリスティックな世界を読者に提供した。しかしながら、歴史的に俯瞰する時、その系譜はファンタジーからリアリズムといった直線的なものではなく、虚構と現実が混ざり合う複雑な様相を呈する。こうした状況を個別化されたホームの感覚を通して検証し、後期ヴィクトリア朝作家の太平洋作品に通底する共通性と差異とを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
19世紀後半から20世紀初頭にかけて数多く出版された太平洋を舞台とする物語を検証し、作者の太平洋についての認識と作品世界の相同性、およびそれまでの太平洋表象の系譜との差異を明確化した。とりわけ本研究は、先行研究がほとんど扱わなかったLouis Beckeの作品世界の解明に貢献している。また、本研究で検証した物語の太平洋イメージは戦前日本の南洋イメージと深く関係する事項であり、中島敦の南島小説などの解釈にも新たな視点を提供する可能性を有する。

研究成果の概要（英文）：This study explored the relationship between the representation of the Pacific in literary works and the influence of the writer's or narrator's sense of belonging (sense of home). The target works were novels in English from the 19th to the early 20th century. The stories that reflected the writers' local experiences provided readers with a more realistic topic and descriptions than those based on predecessors' travelogues. However, when viewed from a historical perspective, the genealogy is not linear, from fantasy to realism, but a complex mixture of fiction and reality. This study clarified the correlation between the literary image of the Pacific through the individualized sense of home, and examined the commonalities and differences underlying the Pacific works of Victorian writers.

研究分野：英語圏文学における太平洋表象

キーワード：英語圏文学　太平洋表象　コロニアリズム　冒険小説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

太平洋像を中心に 19 世紀末の文学作品を俯瞰するとき、太平洋を舞台にした物語が 1880 年代から 1920 年代にかけて突出して多く生産されたことが目を引く。この時期に複数の太平洋作品を書いた作家として、R. L. Stevenson、Louis Becke、Beatrice Grimshaw、Somerset Maugham、Jack London、Charles Stoddard が挙げられる。また、H. G. Wells は *The Island of Dr. Moreau* (1896) の舞台を大平洋の孤島に選んだ。太平洋をアジアにまで広げれば Joseph Conrad、非英語圏作家としては Jules Verne、Pierre Loti も太平洋物語作家の範疇に入ってくる。さらに絵画に目を向けると、そこにはタヒチの島民を描いた Paul Gauguin が存在する。James Cook などの探検家が太平洋を発見しておよそ 100 年後に、太平洋ブームともいえる現象が生じたのである。彼らの多くは太平洋での滞在経験を持っており、作品はそれ以前の太平洋物語のような伝聞情報の受け売りにはとどまらないという特徴がある。しかしながら、太平洋世界との関わりという点においては作家たちの立場はかなり異なるし、それと連動して表象方法も変化する。

太平洋の表象研究については、西洋思想における太平洋像の変遷が 1990 年代からの主要テーマになっており、*Far-Fetched Facts* (Neil Rennie. 1995) や *Representing the South Pacific* (Rod Edmond. 1997)、*Strangers in the South Seas* (Richard Lansdown. 2006) がそれらを包括的に扱った代表的研究書となる。その一方で、女性や野蛮のイメージという特定の表象にテーマを絞った研究も 2000 年頃から出版された。近年の特徴として、*Unsettled Narratives* (David Farrier. 2007) や *Oceania and the Victorian Imagination* (Hoffenberg and Fulton. 2013) のように、実際に太平洋に滞在した作家と彼らの作品に焦点を当てた研究を指摘できる。これらの著作は西洋思想の太平洋像という大きな範疇ではなく、個別の作家の太平洋との関わり合いを、作品を通して明らかにしようとする試みであり、本研究もその脈絡に位置付けられる。

2. 研究の目的

本研究は 19 世紀から 20 世紀初頭にかけての英米文学作品を扱い、その太平洋表象と、作家や語り手の帰属意識（ホームの感覚）との影響関係を探る。18 世紀後半に発見された太平洋島嶼地域は探検家や宣教師、貿易商のための場所でありつづけたが、19 世紀後半の定期船の就航によって世紀末には一般の旅行者にも開かれた。それに伴い文筆家たちも太平洋世界に分け入り、彼の地を扱った文学作品の数が顕著に増加する。こうした作品は、他の探検記や旅行記に依拠したそれまでの物語とは、作家の現地体験を反映している点において一線を画す一方で、太平洋世界をどのような立場から描くのかという問題が浮上する。太平洋に移り住んだ作家、そこを離れてヨーロッパから作品を発信した者、また短期滞在者として太平洋を物語の中に織り込んだ作家といった様々な太平洋との関わり合いが存在するためである。個別化されたホームの感覚を通して作品が提示する太平洋像との相関関係を明確化し、後期ヴィクトリア朝作家の太平洋作品に通底する共通性と差異を導き出す。

3. 研究の方法

本研究の中心的な関心は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての英米文学作品である。しかしながら、当該時期の太平洋表象の幅を同定するためには、ホームの感覚という視点からそこに至るまでの太平洋表象のあり方を再定義する必要がある。また、19 世紀全般における太平洋像の形成には大きく分けて、宣教師や探検家が持ち帰った太平洋についての一次資料と、それらを利用して作られた物語といった二つの層が存在する。したがって、本研究は（1）19 世紀の宣教師による太平洋像の形成、（2）19 世紀の冒険物語が提示する太平洋イメージ、（3）19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパから太平洋に移り住んだ作家、また太平洋からヨーロッパに移住した作家が描く太平洋像、（4）短期滞在者による太平洋世界、という四つの項目を扱う。

本研究が 1800 年頃を起点とするのは、19 世紀の太平洋物語に頻繁に登場する宣教師の太平洋での活動が、この時期に開始されるからである。なかでも John Williams と William Ellis の著作が、当時の太平洋言説に与えた影響の大きさの点で重要になる。（項目（1））

項目（2）においては、19 世紀初頭から中盤にかけての太平洋を舞台とした物語の太平洋表象が研究対象となる。該当する物語の多くは少年向け冒険物語で、Marryat や Ballantyne などが描いた冒険の場としての太平洋は、そのイメージの一般化という点で大きな役割を果たした。彼らのホームであるイギリスにおいて、探検家や宣教師による成果のどの部分をどのように読者に提示したかを探り、項目（3）の検証の視座を確立する。

本研究の中核となる項目（4）においては、作家たちのホームの感覚を中心に検証する。対象作家は、太平洋世界で生涯を閉じた Stevenson、オーストラリア人作家 Becke、女性ジャーナリスト Grimshaw である。Becke と Grimshaw は文学史ではほとんど言及されないが、前者は故郷としてのオセアニア世界、後者は植民主義への寛容な態度を擁しており、それらが彼らのホームの感覚に影響を与えている。彼らの主体の位置と太平洋表象の相関性を探り、その特徴を同定す

る。
最終段階の項目（4）は旅行者（短期滞在者）による太平洋表象に焦点を合わせる。Maugham、London、Stoddard は太平洋での滞在期間が短く、地域への関わり方も訪問者の域を出ない。また、H. G. Wells の作品から看取できるように、彼らにとっての太平洋世界は項目（2）で扱った作家たちのものに近い。項目（3）の作家の同時代人として短期滞在者による太平洋像を比較・検討することで、項目（3）の結果の相対性を確保する。

4. 研究成果

本研究の成果は、記録文献上の太平洋表象の移り変わり、物語における太平洋表象、特異な表象例、の三つの層に分けることができる。

(1) 記録文献における太平洋表象の遷移

19 世紀の太平洋イメージを再定義するため、19 世紀初頭から中盤にかけての宣教師の記録の読解と関連資料の検証を行った。とりわけ詳細で多岐にわたるポリネシア地域の観察記録である *Polynesian Researches* (1829-32) は、18 世紀後半の航海記と 19 世紀後半の旅行記を結ぶ中間点に位置する。James Cook や Bougainville による航海記は太平洋世界との初めての邂逅を記述するものの、現地の観察という点では過剰な想像力が働く場面も散見される。これは現地の人々との間に共通の意思疎通手段を持たなかったことが大きな要因となっている一方で、彼らのホームの感覚に少なからず起因する。一例を挙げるとすれば、Bougainville の航海記に 1768 年 4 月 6 日に記録されたタヒチでの歓待の描写で、語り手と現地との距離を端的に物語る。西洋文明の製品を入手するためにヨーロッパの船に群がってくる大量のカヌーには、島民の交易品の一つとして若い女性が同行している。語り手は彼女たちの容姿に目を奪われ、その美しさを「天上界のもの」に喩える。この場面に刻印されているのは、楽園に足を踏み入れたヨーロッパ人の驚愕であるが、同時に禁忌の世界への自制も働くのである。語り手は即座に女たちを追い払い、島民と船員との間に距離を設けようとする。当然のことながら船長である語り手自身はより強力な節度を保ち、結果として彼と島民との隔絶性を読者に強調する。語り手のホームはヨーロッパであり、太平洋の人々はそこへ侵入することは許されないのである。

新たな事物や習慣の発見が 18 前世紀の航海記の主要なテーマとなる一方、Williams や Ellis の記述の特徴の一つは、島民に対する宥和的な態度である。キリスト教の布教という使命を持っているため、宣教師たちは現地の言葉や習慣を理解しようとする。*Polynesian Researches* は太平洋世界を百科全書的な知識の体系化の試みであり、それによって島民の教化の正当性も訴えつつも、しばしば述べられるヨーロッパ世界との比較は西洋の参照枠におけるポリネシア文化の位置付けに寄与し、結果として島民を完全な他者として扱うことを回避している。また、キリスト教に改宗した島民は宣教師にとっては兄弟となり、その土地は彼らの新たなホームとなる。西洋と非西洋を越境する宣教師は、キリスト教徒という絶対的なアイデンティティは保持するものの、現地の人々の生活に分け入り、その過程で彼らの風習に対する共感を深めていく。結果として、彼らの記録も西洋と太平洋世界の妥協点を探っているようにも映るのである。

宣教師による異文化の収集と分析は 19 世紀半ばに登場する人類学の姿勢にも通じる。さらにこうした島の生活に深く入り込もうとする姿勢は、19 世紀末になるとジャーナリズムの形をとる。アイルランド出身の Beatrice Grimshaw は太平洋の滞在歴の長さや女性である点で、当時のジャーナリストの中でも異彩を放つ。しかしながら、1907 年に出版された *From Fiji to the Cannibal Islands* は探検記というより旅行記に近い。秘境への侵入というテーマにもかかわらず、先行する探検家や宣教師による報告の追体験の色が濃いのである。さらに、本の末尾に「フィジーへの行き方」という補遺を付け、イギリスから彼の地への旅程を詳細に提示するとともに、旅費にまで言及していることも、本書の旅行ガイド的な側面を強調する。後年の彼女の植民地主義への支持を見ると、太平洋世界は Grimshaw のホームにはなり得なかった可能性も指摘できる。以上のように、記録文献による太平洋表象を辿る時、記録者の目的や立場によって太平洋の描き方のニュアンスがかなり異なってくることが確認できる。

(2) 物語における太平洋表象の遷移

本研究で取り上げる作家たちは、太平洋を題材にした物語を制作することにおいて共通性を持つ。太平洋表象の差異は、作品を取り巻く時代と作家の太平洋世界への向き合い方が大きく影響することを確認できた。

18 世紀末の人々に最も影響力のあった物語テーマがバウンティ号での反乱である。その原型となったのは、William Bligh による *The Mutiny on Board H. M. S. Bounty* (1790) と *A Voyage to the South Sea* (1792) で、反乱の経緯と小型船でのティモールまでの漂流が語られている。しかしながら、生還した Bligh は冒険の英雄とはなりえず、指導者としての狭量さが戯画化される。その代わりに、Fletcher Christian のヒロイズム、新天地を求めての美しい現地女性との逃避行などのロマンチックな側面が、バウンティ事件の印象として一人歩きするのだ。言うまでもなく、この物語の背景にあるのは初期の探検家が提供した太平洋の楽園イメージであるが、当時のロマン主義への傾倒がそうした太平洋像の更なる美化につながり、結果として Christian の賛美へと発展するのである。見方を変えると、太平洋を新たなホームに選んだ反乱船員に対するヨ

ーロッパ人の憧れがバウンティ号人気を支えたともいえる。

そうしたロマンスの世界を引き継ぎつつも、太平洋世界の現実を垣間見せようとする作品が Herman Melville の *Typee* (1846)である。この物語もバウンティものに倣い、体験記という体裁で語られるものの、その内容の多くが Melville の創作である点で、それまでの航海記や宣教師の報告書とは大きく異なる。食人族の村に迷い込んだ脱走船員が、美しいタイピー族の女性と享楽的な時間を過ごしつつも、食人族の犠牲になるかもしれないという、不安定な心理状態を描く一方で、島民とともに生活し彼らを観察する人類学的な側面も併せ持つ。たとえば原始性や食人の習慣でさえも、西洋社会と共通する習慣を探そうとする態度がそれに該当する。非西洋の文化を引き合いに西洋文化を批判する手法は、ユートピア物語でしばしば用いられるが、*Typee* はヨーロッパの欠点を過度に強調することはなく、他方、未開人を礼賛することもない。ただし物語は、白人の干し首を見つけて精神的恐慌状態に陥った主人公が真相を発見しないまま、命からがら村から逃げる冒険譚に収斂する。

冒険の舞台としての太平洋というモチーフは少年向けの物語に受け継がれる。代表的な作品は R. M. Ballantyne による *The Coral Island* (1857) で、ここには *Typee* の主人公が悩まされた未知のものへの不安や恐怖はほとんど存在しない。代わりに描かれるのは、見知らぬ世界での経験を驚きをもって楽しむ健全な少年たちの姿である。しかしながら、物語は前半と後半で、その雰囲気がかなり異なる。船の難破で南海の孤島に漂着した三人の少年たちを待っているのは、過酷な自然ではなく、穏やかな気候で衣食住が満ち足りた環境である。他方、後半になると物語は活劇へと一変する。食人族との戦いに始まり、海賊による捕囚と彼らの島民との貿易、海賊への食人種の襲撃、島からの脱出、宣教師との邂逅、島民のキリスト教への改宗、と太平洋における過去 80 年のヨーロッパ人の活動のパノラマが展開される。そこには西洋的な価値観についての疑いの眼差しもなく、西洋人の少年の潜在力が最大限に発揮される理想的な場なのである。翻っていえば、この屈託のなさこそが太平洋の知識の一般化の指標となる。1840 年代の列強による太平洋諸島の植民地化を経て、もはや太平洋世界は魑魅魍魎の世界ではなくなった。そこはキリスト教徒の少年が自らの良心に従いつつも、普段の束縛から解き放たれて自由に行動できる野外学校となる。

Ballantyne の作品の無邪気さは、ヴィクトリア朝の最盛期という状況が大きく貢献する。*The Coral Island* における致命的な誤謬に「椰子の実をポケットに入れる」場面が指摘されるが、物語と作家の心理的な距離としても解釈できる。すなわち、図鑑の中の見知らぬ世界でさえもイギリスというホームの一部であり、将来大英帝国を担う少年たちの予行演習の場なのである。

年少向けの物語の舞台となった太平洋物語に、再び現実性を付与しようとしたのが Stevenson である。1890 年にサモアに移り住み、西洋に向けて太平洋を舞台にした作品を送り出した。"The Beach of Falesá" (1893)、*The Ebb-Tide* (1894)は太平洋地域における現実の白人の状況を描き出す。物語の最後に西洋社会に帰還する *Typee* や *The Coral Island* の登場人物とは異なり、"The Beach of Falesá"の主人公は島を離れることができない。ポリネシア人の妻との間にできた子供達のことを心配しているが、彼を最も悩ませるものは彼自身の人種差別的な考え方である。イギリスに帰りパブを開く夢は、太平洋で囚われの身になった主人公が、自らのイギリス人性を確認するための慰めにほかならない。冒険物語の体裁を取りつつも、もはやそこには食人種も海賊もおらず、戦う相手は同業の白人貿易商となる。そして、商売敵が消失したとたん、島民との暮らしの中でヨーロッパ人の主体のあり方に向き合わざるを得ない。Stevenson の南海物語は、太平洋を西洋人にとっての現実的な生活の場所へと変化させている。

その一方で、Stevenson が目撃した太平洋世界には、前時代的な非日常性も存在した。彼が居を構えたのは第一次サモア内戦の終結（1889）後だったが、依然としてドイツ、イギリス、アメリカが領有権をめぐって緊張状態にあり、大酋長の地位を巡って部族抗争が続いていた。彼はこの紛争に積極的に関与し、*The Times* には現地からの抗議状を送り、*A Footnote to History* (1892) と題する歴史書を執筆した。また、彼の当時の書簡には、不穏なアピアの雰囲気や彼自身の行動についての記載が目立つ。ただし、こうした Stevenson の植民地紛争への深入りについては、彼の代理人が警告を送っていたにもかかわらず、それを聞き入れようとしなかったことも留意すべきだろう。現地では重大問題かもしれないが、ヨーロッパでは数ある植民地の問題の一つに過ぎないという温度差を表すからである。この認識の隔たりこそが、太平洋が持っていた冒険の場という特権の喪失を意味すると同時に、Stevenson 自身の太平洋についてのホームの感覚を顕在化させる。

Grimshaw についての箇所でも述べたように、20 世紀に入ると太平洋世界の変容が顕著になる。古くから西洋人が移り住んだサモアやタヒチは、すでに観光の拠点となっており、定期船運行会社は欧米の観光客を呼び込むために様々な広告を打っていた。Somerset Maugham もそうした旅行客の一人で、"Rain"（1921）の主人公も同様である。作中でのアピアは保養地の中継地点として登場し、そこには命懸けの戦闘も脱出も入る余地がない。また、現地の人々は物語にほとんど姿を見せず、事件の核心となる売春婦も白人である。すなわち、"Rain" の舞台がアピアである必然性は、宣教師と売春婦との邂逅の可能性と長雨の気候だけで、そのほかの太平洋の特徴は物語の背後に消失してしまっている。

物語における太平洋表象の変化は、その時代の太平洋の状況を反映する一方で、作者と太平洋世界の関わりも大きく関わってくる。本研究で確認できたのは、関わりが薄い作家ほど楽園や野蛮といった非日常の太平洋的側面を提示してしまう傾向があることだ。上では言及していない

が、H. G. Wells の *The Island of Dr. Moreau* もそのような作品の一つである。こうした作品は太平洋世界の異郷感を誇張し、ホームからの距離を強調する。また、Maugham のような短期旅行者においても太平洋は物語の題材の一つに過ぎず、ホームとは別の世界になる。他方、Melville や Stevenson の太平洋物語の主人公は島民の思考方法にまで言及し、彼らを西洋人の延長線上に位置付けようとする。ここには作家の現地での体験と共感が深く関わっている。

(3) 特異な太平洋表象

現在ではほとんど論じられることはないものの、本研究において重要な作家となったのが、Louis Becke である。太平洋地域での非合法貿易に携わっていた（と匂わせる）経歴によって、「太平洋世界の裏を知る者」として 1894 年に文壇に登場した後、瞬く間に時代の寵児となる。Becke の初期の短編物語は殺人や裏切り、計略に満ちており、こうした過激さは、Stevenson、Wells、Maugham の南海物語にはほとんど見当たらない。むしろ、彼らの物語の主人公は、自己の欲望や感情を制御し、いかにして西洋の規範から逸脱しないようにするかに腐心しているようにみえる。そうした物語と Becke の小編とを比較すると、後者の赤裸々さが際立つのである。ただし、歴史を振り返るとき、Becke 太平洋表象はけっして新しいものではない。あからさまな性的な描写は、Bougainville の航海記における、鉄製品を求めて自らの肉体を水夫に提供するポリネシア女性によって体現されている。また、John Webber が描いた James Cook の殺害の場面は、絵画やエッチング画となって 18 世紀の人々に強烈な印象を与えた。Becke の作品が提示する太平洋は 19 世紀末をその舞台としているものの、剥き出しの性と暴力を強調する前世紀の描き方を思い起こさせるのだ。探検家達が太平洋世界を切り開いてからの 100 年余りの間に、ヨーロッパは布教、交易、植民地化などの過程を経て、様々な知識を蓄えてきた。そうした知識は太平洋世界を、夢想の世界から現実の世界に変えたが、その一方で、非現実の世界として太平洋イメージは生き残り、Becke はそれを作品の中に過剰な形で再現したのである。もちろん、Becke 自身の誇張した経歴が、彼の作品の世界観に説得力を与えたことは想像に難くない。しかしながら、Becke の才能で特筆すべきことは、現実の太平洋世界と非現実的な太平洋像との境界を見極めたことだろう。そして、少なくとも初期の短編集においては、境界線上近くの現実的な太平洋の領域で、可能な限りグロテスクで生々しい欲望が溢れる世界を提示してみせたのだ。

他方、短編集で描出した生々しい太平洋表象は、長編ものにおいてはしばしば消失している。好評を得た *Edward Barry* (1900) は真珠採取人の主人公が海賊まがいの悪党に騙されて雇われ、彼らが企画した無人島での真珠採取と悪党一味からの脱出を成功させる物語であるが、グロテスクな場面はほとんど存在しない。最後には Barry とヒロインが結婚し、物語は大団円を迎えるという、典型的な勧善懲悪の大衆ロマンスである。また、末期の冒険物語 *The Adventure of Louis Blake* (1909) も同様で、平凡な人物描写は Ballantyne の少年冒険物語をそのまま大人向けにしてしまったかのような感がある。効果的な場面で物語を閉じることができる短編物語の技巧を、長編物語では使いにくいという制約を考慮しても、彼の長編物語は凡庸な、時代遅れのヴィクトリア朝大衆小説の印象を拭えない。

Becke の短編物語は 19 世紀末のイギリスやアメリカの読者に衝撃をもたらした。しかし、歴史的には帝国主義の絶頂期を越え、世界の分割が完了しようとしている段階において、未だ人々が知らない世界を描き続けることは簡単ではない。Becke が Stevenson の後継者になれず、また Conrad のような微妙な心理描写に焦点を当てることもできず、Maugham 的な日常を拡張した太平洋世界を開拓できなかったのは、彼が見極めた現実と非現実の境界から、彼自身が抜け出せなかったことを示唆している。その姿はオーストラリアというホームと太平洋というもう一つのホームの狭間に囚われていたかのように映るのである。

本研究で解明した物語における太平洋像とホームの感覚との関係は、物語の荒唐無稽さと太平洋までの心理的な距離との相関性が指摘できるものの、その普遍性を保証するものではない。その要因として本研究の後半に重要な要素として浮上したのが、読者と作品の売上の問題である。Becke のように太平洋地域に愛着を抱きつつも、西洋の読者を意識して「売れる」物語の創作に注力した作家が具体例となる。太平洋物語とその経済的効果については、先行研究がほとんど存在しないため、本研究の発展の可能性の一つとして考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 山本 卓	４．巻 14
２．論文標題 南海小説の系譜におけるLouis Becke	５．発行年 2022年
３．雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要 = Bulletin of the Faculty of Education	６．最初と最後の頁 111～123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24517/00065767	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Taku Yamamoto
２．発表標題 The Pacific Imagination and the Narrative of Romance: Louis Becke, Joseph Conrad, and Robert Louis Stevenson
３．学会等名 第4回日本コンラッド協会大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本卓
２．発表標題 オセアニア文学とAnthropocene―ポスト・コロニアリズムと環境学の接点を探る
３．学会等名 第69回日本英文学会中部支部大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関